
ネ申×2＋庶民=???

枢木 荒野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネ申×2＋庶民Ⅱ????

【Nコード】

N5469X

【作者名】

枢木 荒野

【あらすじ】

ネ申

ネ申

庶民

この関係が崩れる時はいつかくる。

そう思うと

苦しくなる。

辛くて真っ白になる心の中で

小さな叫びが聞こえた。

ネ申二人と私。(前書き)

Hello?

とりま新しい小説書いた?

今度は完結させてやるからなっ!!

覚悟しやがれっ?

ネ申二人と私。

「あっ！見つけた！いつみてもイケメンっ！！」

まただ…よく飽きないな…。なぜ女はそんなに面食いなんだろう？
所詮外見だけで男を見極めるただのバカだ。

「いたっ！鳳来君！」
ほうらい

「えゝ？篠宮君でしょっ！」
しのみや

あれだな。あいつらだ、あいつらのコトだな。

” 間弓台高のネ申 ”

つまりは間弓台高校（金持ちの集まる高校）のイケメンツートップ。
群がる女はまるでアリの大群だ。

噂をすればだ。

ネ申（？）が来た。

来るぞ…まずは鳳来が…

「恵！帰ろう？」
けい

ホラね。

毎日毎日毎日毎日っ！！

コレの繰り返し。

「ちょっと黙ってくれないかな？私は今読書してるの。空気読んでほしいな。特に鳳来。」

「えー？ 篠宮はあ！？」

「春樹はるきは何も話してないでしょ？ そんなコトもわからなくなったのか、可哀想な鳳来君。」

「っるせ！ いーもんっ！ アイス奢らねーから！」

こいつらは一体なんなんだ？

金持ちに見えない金持ち。

実は私はこいつらの召し使的な扱いを受けている。…いやじゃないケド…。

……っと、こんな私。ひゅうが日向恵は高校二年である。

うるさいのが鳳来秀仁。ひでひと無口が私の従兄弟の篠宮春樹。春樹はロシアとのハーフで金髪。

「無駄にかまうのは疲れるなあ…。」

でも、何故かそばに居たいのが本音。口には出したことないケド、二人は私にとって大切な人。…でもイケメンには見えないな…。

「…校門…閉まるよ…早くしないと。」

「わかってるよ。今行く。」

「俺バニラね！」

「……チョコ。」

「なんで私が払う？一般庶民に払わせるなんて、卑怯な人たちだ。」

そう。庶民。私は校長推薦で入学した一般人。春樹が進学するつてきいたからここにした。

「別にいいじゃんっ、召し使いちゃん？」

鳳来がニヤニヤしながら顔を近づけた。春樹は無表情でチョコアイスを店員さんから受け取った。

「後で返してよね！」

「サンキューです！」

「………美味しい。」

二人は超高級マンションに住んでいて、私はその隣の平屋の一戸建てに一人暮らし。

「んじゃっ！俺は塾にいつてきまゝす！」

「………バニラ溶けてる……。」

「何っ!？」

こんな生活が……

続けばいいのに…。

ネ申二人と私。(後書き)

鳳来秀人君

鳳凰の一文目からとった。(O^V^O)

篠宮春樹君

皇族の秋篠宮様からとった。(^|^)V

ネ申っぽくない？

関係の行方（前書き）

マヂ楽しい？

超絶やばスグる？

デモ誰か読んでる？

読んどったら感想かポイント下ちい？

∴ GANTZ（笑）

知ってる人は、知っている。

関係の行方

「恵〜！ご飯おごってちよおだいっ？」

「無理。私、今日財布忘れたから。」

「じゃあ弁当一口！」

「鳳来の一口はでかいから却下する。」

春樹が学校を休んだ。私に連絡はきてない。鳳来は春樹がいないから暇そうだ。…二人だと気まずい…。

「秀人〜！こっちで一緒に食べよう？」

「マヂ？いいのっ!？」

「早くっ!」

鳳来を呼んだ女子が私をドヤ顔で睨む。なんで睨まれなきゃいけない？理解不能。

……ああそうか。アイツネ申なんだっけ？

改めてよく感じた庶民の立場…。明るい教室の端っこの一番暗い廊下側の席。ここが唯一の私の定位置。

ブブブブブツ……

携帯のバイブがなった。……春樹だ。

”至急、家にこい。熱、38度。親は仕事でいない。”

「……………は？」

早退をして春樹の家に向かった。あの教室を抜け出せたからよしとしよう。

ピロポロンッ、ピロポロンッ…

高級感あふれるチャイムを鳴らすと、すぐに春樹が出てきた。

「熱でたって、大丈夫なわけ？」

「……………ん…。……………入って…見られたらサボりだって思われる。」
春樹の家に入るのは何年ぶりだろう…。小さい頃はよく二人で昼寝をした。小学校から春樹は間弓台附属小学校に入ったから、それほど付き合いはなくなった。

「起きてて大丈夫なの？」

「嘘…ついた…全然元気だよ。」

「何それ！？心配したのにつ！！」

ダンッ……………！！

春樹が突然、拳をテーブルに叩きつけた。少し顔が歪んでいる。

「……………っ。」

「春…樹？」

「アイツに、取られたくないんだ。…ただ二人に……………」

一瞬、キリッとしたクールな目で私を睨んだ。そして一息溜めて…

「恵が好きだ。」

「従兄弟としてじゃない……」

「好きだ……。」

「……え？」

その時は気付かなかった。

これから始まる

泥沼の人生に……

関係の行方（後書き）

ワチャアアアツ／／／／！

展開早スグるわ？

頑張りヤス？

恋を知りたい（前書き）

第三話だス？

恋を知りたい

春樹にいきなり告白された。「好き」と言う言葉は幼稚園以来言われたことがない。

「……どう、すればいい？」

「別に……付き合ってほしい……。」

「従兄弟同士だけど。」

「……法律に違反はしてない。違反、してるなら……戸籍変える。」

春樹の目は本気だった。私は、そういうのは……

「ごめん。今までそういう感じで見てなかった。」

率直に自分の意思を言った。私は恋をしたことがない。だから、何もわからなくて……

「……そう……、だったら……。」

「恵が、俺しかみれないようにしてやる……。」

「一生、俺だけみてればいい。」

そう言う春樹は、顔をそむけた。用はそれだけだからと、私に帰るように言った。だから私は部屋をあとにした。

次の日は春樹はきちんと登校した。鳳来は嬉しそうに側を離れようとし……、ある意味気持ち悪い……っ。

「お前、昨日どしたんだよお？」

「……………」

「おいっ！何なんだよお！？」

授業中、先生が出張で自習。

「日向さん？」

「何？」

クラスのネ申ファンの女子たちが、私の周りに群がった。春樹と鳳来は…サボりだ。

「篠宮君と、鳳来君に近づかないで！」

「ウザいんだよね、二人に媚び売ってんでしょ？」

囲まれてしばらくたった。私は何も言うつもりはない、こいつらの言う通りにはしないつもりだから。

「キモいっ！！」

みんな笑っている。不愉快だ…何が面白い？

「あんたたちには従わない。二人は私の友達だから。それに春樹は従兄弟だ。」

特にこれと言って言うヤツはいない。言い返す言葉がないのか、ただ睨むだけなのか…。

「ん？みんな何してんのっ？」

「ひっ…秀人っ！！」

鳳来がくると一気に女子が散らばった。そこまで鳳来がいいのか？なぜ、男に対しての性格が変わるのか…それも…………

”恋”なのか？

恋を知りたい（後書き）

次も頑張りやすぜえ？

あゝBASARAやりてえ？

春樹の行動、秀人の行動。(前書き)

ありやりや (; ^ | ^ A

四話やっちゃったよ？

春樹の行動、秀人の行動。

「篠宮っ！！その髪っ！！」

女どもが見る先には、髪を染めた春樹がいた。金髪から黒髪に。さらさらとした耳の隠れるくらいの短髪が、女どもにいいじられている。

「春樹一体何があったの？恵、知ってる？」

「…知らない。」

鳳来が春樹にあまり近づかない。

「鳳来、なんであっち行かない？普通なら飛んで行くだろ？」

「恵がいいっ！」

鳳来は私の隣に座ってコーヒー牛乳を飲んでいる。

「恵……顔が怖いよ？何かあった？」

鋭い。無駄に鋭い。確かに春樹のこともあって、最近はまだ眠れない。

「……………」

「何？」

「恵はどうして、俺を苗字で呼ぶの？」

「じゃあこれから秀人って呼ぶ。」

……視線を感じる。誰だろう……。振り向いても誰も私を見ていない、勘違いか？

「……………恵？」

「そうだ！いっしょにきてっ！」

秀人は私の腕を掴み、教室をでた。気付く奴は誰もいない。みんな春樹の髪に釘付けだった。

「何処行くの！？？」

「屋上っ！」

「何でっ！」

「告白するからっ！」

「はっ！？？」

屋上へ続く階段をかけのぼりながら、スピーディーな会話を交わす。秀人は笑顔で…私は、苦笑い。朝の校舎に二人の足音が響く。

「…恵？…恵は…？」

「日向さん？知らない。」

春樹の行動、秀人の行動。(後書き)

さてさてどうなる？

それぞれの気持ち（前書き）

残りの文字数がZERO？（櫻井翔です……違うかあ☆）
まで書いてました？
長くなったかな？

それぞれの気持ち

「あのさあ、このままサボってみねえ？」

秀人に連れてこられた屋上で、ゴロンと横になった秀人が言った。
「篠宮に何があったの？本当は知ってるんでしょ？」

無駄に鋭いのはほかのことに活かせないのか？つくづく思うが、とりあえずこの間の出来事を話した。

「えっ……コクられた？篠宮に？」

「従兄弟同士だし、そういう感情……私には無い。」

「そっか……」

秀人が急に黙り込んだ。沈黙が続く。先に口を開いたのは秀人だった。

「アイツ……何も言わなかった。恵、たぶん、アイツを焦らせてるのは俺だよ。」

「は？何で？」

ハアと溜め息をついて、秀人は立ち上がった。立ち上がった秀人は大きく見えたのは、私がしゃがんでいるからだろうか……。

「言おうと思ったけど、やっぱりいい。」

そう笑顔で言った。秀人に、何故かきいてみようと思った。

「ねえ、……恋って、何？」

春樹から好きだと言われて浮かんだ疑問。私には難しい、わからない。秀人はしばらく考えて言った。

「それを知りたいなら、お前は篠宮をふることになる。」

「俺が答えを教えてもいいけど、今の恵には難しすぎ。」

「だから、俺の言いたいこと…わかる？」

まっすぐな目で私の目を見ている。秀人の言いたいことがよくわからない。

「やっぱわかんねえか…あゝ、くそっ！」

「……………何？」

「いいか！よく聞けっ！！」

なかなか話だそうとしない。うつむいたままの秀人は、手をもじもじとせわしなくいじっている。そして…

「……………っ！！」

キーンコーンカーンコーン……………

チャイムが鳴った。だが動こうとしない。

「聞こえた！？」

「イヤ、何も。」

すると、会話が途切れたとたん、秀人が泣き出した。

「お前は篠宮と俺と、選べって言われたらどっち？！」

突然投げ掛けられた質問に戸惑った。

「無理、選べない。何で急にそんな…。……………！？もしかして秀人、私のこと…想ってくれてるの？」

ゆっくりうなずく秀人は、寂しそうな表情をしていた。

「恵のことが好きだって、篠宮に相談したんだ。……篠宮の気持ち、知らなくて…。」

ギィィ……

鈍い音がして屋上の扉が開いた。

「恵? ……鳳来? 何してるんだ…二人で。」

「…春樹。」

「篠宮あっ!!!」

「お前には絶対、恵はわたさないっ!!!」

大声で叫んだ秀人は、ジロリと春樹を睨んだ。

「望むところだ。」

ここから、あの関係が崩れていった…。

それぞれの気持ち（後書き）

ついに二人がバトルですかね？

私にもわかりやせん？

アタック；秀人編（前書き）

えゝ…………

書いていたら秀人まみれに？（；^| ^A

なので秀人編です？

アタック；秀人編

ぎこちない。今、私の両脇には春樹と秀人がいる。

「ねえ！ 恵の家に行きたい！！」

「別にいいよ。汚いけど。」

「やったあ！！」

喜ぶ秀人をじろりと睨む春樹。それをみてにやりと笑う秀人…。

「篠宮あゝっ！ どしたあ喧嘩？」

でた、意味もなく飛び込んでくる女ども。

ただたんにネ申と話したい、そんな思いだけの追っかけ。

「…何でも…ない。俺に構うな。」

「えゝ？ 何それえ…。」

「お邪魔しまあす！」

一人暮らしの私の家は狭い。住めても三人が限界だろう。この家には春樹と、今入ってきた秀人以外入れたことはない。

「何か飲む？ コーラかお茶だけだけど。」

「コーラ！」

春樹は学校の委員会で遅くなるって言ってたし、まあ…いっか。

「何もないけど、何するの？ てゆうか何故きた？」

「暇だから。」

……シュワツ……

コーラの炭酸がいつもよりきつく感じる……。五分程の沈黙の間に飲みきってしまった。

「今まで好きな人いたことあんの？」

秀人からの突然の質問。……いつも思うが、秀人のペースにはついていくのに苦労する。

「そういえば……いない。」

「でしょっ！ その初恋のスペースには俺が入るから、開けておいてね！」

「いや、わからないよ。もしかしたら春樹が————」

ガタンッ！！

突然、秀人が私の上に四つん這いになる……。そして右手で私の右手を押さえつけた。……動けない。

「俺と二人の時に、篠宮の名前でしたら……」

「次は襲うよ？」

近い……。20センチと離れていないのではないのか？ とてもまっすぐな目をしている……綺麗な黒い瞳。動こうにも、動けば秀人と

ぶつかってしまふ。どうしよう…どんどん顔が熱くなる。

「あ…：もしかして今、ドキドキしてる？　…かわいい！」

「なっ…：！！！」

一気に顔が熱くなった。

「そろそろアイツくるよね、帰るよ。」

「そう…。じゃあまた明日。」

そう言って玄関まで送る。

「そうだ。もしアイツに何かされたら、すぐに何されたか言っで！」

「それ以上のことをしてやるからっ。」

アタック；秀人編（後書き）

次は春樹編を書きます？

春樹ファンの方がいたら
お待たせしました？

アタック；春樹編（前書き）

春樹ファンとか：

まず、いないよな？

アタック；春樹編

春樹の無口ぶりがさらにました気がする。黒髪に眼鏡が、クラスで一際輝いている。

「……恵……そんなに見られると困る。」

「あ……春樹、顔赤い。」

ほんのり赤い春樹の顔が下を向く。そして秀人が割り込んできた。

「ヤッホー！ 何してんのお？」

「恵、あっちへ行こう。」

腕を捕まれ立ち上がる。無言で見送る秀人……

「ここなら誰も……こないから……。」

生徒会室に連れてこられた。私はここに入ったことはない。部屋の角のロッカーには”会長 篠宮”と書いてあった。

「昼休みはここにしよう……中から鍵、閉めたから……。」

「うわぁ……賞状がたくさんある。」

「俺にみせてるそれが……素の……恵なのか？」

春樹が唐突に聞いた。何を言っているのかはよくわからないが、一応答えよう。

「まあ、いつもの私だけど？」

「そうか……。」

「何？ どしたの？」

「……………」

窓を開けて深く息を吸う春樹。爽やかな風が入ってくる生徒会室。しばらく沈黙が続いた。

「本当の…恵を知りたい。」

歩み寄ってくる春樹は真剣だった。

「今まで、本気で笑った恵は…可愛かった…」

「けど、最近は笑わない。」

私の髪を撫でる手が大きくて、少しドキッとした…。なかなか話し出さない春樹…。だから私が先に口を開いた。

「あまり面白いことがない。」

「だから俺が、…笑顔にさせるんだ。」

私の耳元に顔を近づけて、そっと…抱きしめた。

…苦しい…今までこんなことされたことはないから、余計に苦しく感じているのか？

「…あつ…ゴメン。」

「戻ろう…か…。」

「うん。」

正直ドキドキが止まらない。顔が熱い…歩いている春樹が突然足

を止めた。

「次は…あれくらいじゃ、すませないよ？」

ニヤリと春樹が笑う。そのとたん顔がどっと熱くなるのを感じた…
…顔が赤くなっていらないように願っていたのだが、春樹の一言で、その願いは無駄になった。

「赤い。なんだ、照れてんじゃん……。」「

「春樹、どうして髪を染めたの？」
照れ隠しだ。

「……前に恵が、金髪の外国人みて…怯えてたから。」「

「七歳のころね……。」「

アタック；春樹編（後書き）

さあてどうなるのかな （ニヤリッ

気持ちのざわつき(前書き)

うはー疲れた。

気持ちのざわつき

「……………」

今までと違う、お昼休みの雰囲気。秀人と春樹はずっと黙ったままで、パックの牛乳を飲んでいる。

「あのさ、二人に言いたいことあるんだけど。」

「ん？ なに？」

「……………」

笑って私をみる秀人、半分無表情で私をみる春樹。……………何故だろう…落ち着かない。

「二人が仲良くないと、学校生活がつまらない。」

結局、二人は放課後まで口をきかなかった。ひとつ気がかりなのは、この落ち着かないそわそわした気持ち。

一人でいる家は薄暗かった。でも、私はこの空間が世界で一番好きだ…。

「私は…春樹と秀人、どちらを選んだらいいんだろう…？」

「それはもちろん、俺だよ……………」

声がして後ろをむくと、春樹が座っていた。

「何故いるのっ!!?」

「鍵…開いてたし、暇だから。」

気配もなく入ってくるなんて…まだまだ謎が多いな…。

「昼休みのことだけど…俺と鳳来は仲良くはできない。アイツはライバルだから…。」

胸がそわそわする…二人がとても仲が良かったのはもう1ヶ月前のこと。

「私はどっちも選べないよ。選んだらどちらかが、離れてしまうから…………。」

私は今、人生で一番の悩みを抱えているのかもしれない……。

気持ちのざわつき(後書き)

ふはあゝ

意味不明になってきたあ

思わぬ襲来；1（前書き）

今回はパート2まであります。

新しいキャラが登場します☆

思わぬ襲来；1

今日は朝から暇だ。今は委員会。春樹は生徒会へ、秀人は生活委員会。私は保健委員会だ。

「日向、話聞いている？」

「あっ！ 聞いてます。」

まだだ……誰かに見られている気がする。誰なんだろう……。気になるけど後ろ向いたら先輩に怒られるし……。

「以上です。解散します。」

やっと終わった。長いしだるいし何より面倒だ。

「日向さんっ！」

呼ばれて振り返ると、たしか同じクラスの………

「ことりです。長池ことり……。」

「ああ……何か用？」

ぶっきらぼうになってしまったか、少し戸惑っているようだった。

「あの……一緒に帰ったら、ダメですか？ 日向さんと近所なんです。」

「別に構わないよ。暇だし……。」

長池がニコツと笑う。そんな風に笑われるとこっちが対応に困る。

「委員会も一緒ですよね。」

「敬語やめてよ。」

「あっ…じゃあ恵ちゃんって呼んでい…い…かな？」

「…いや、恵でいい。私もことりって呼ぶ。」

大人しくしておしとやかな子だ。やはり間弓台に相応しいお嬢様なんだろうな…。でも、どうして私なんかと一緒に？

「…恵って、ネ申サマたちとよく一緒にいるよね。」

「仲がいいやつは、あの二人だけだし。」

校門のところでことりが聞いてきた。そういえば、春樹と秀人はまだなのかな？

空は曇っていた。傘を忘れてきた。雨も降りそうだし、早く帰ろう。”曇天”という曲の歌詞とぴったりの状況だな（笑）

「恵は…どっちが好きなの？ 春樹サマと秀人サマ…。」

「よくわからない。春樹は従兄弟だし、秀人はただの親友だから。」

「従兄弟と……親友……。」

「……？ 何？」

「いやあ…別に！」

こたりの表情が固く、感情が読み取れない。

学校近くの大通りまできたところで、ついに降ってきた。近くのコンビニで傘を買うしかないか…。

「恵ーっ！ 待ってくれよお！」

バシャバシャと音をたて、秀人が春樹を引っ張って走ってきた。…久しぶりにこの光景を見た。あの二人が一緒にいるところを……。

「ほら……傘、入って……濡れるよ？」

「ズリイぞ！！篠宮っ！相合い傘かよっ！」

お言葉に甘えて入れさせてもらった。ことりは折り畳み式を持っていた。

「いーなあ恵……春樹サマと相合い傘。」

「わあことりちゃん！ 恵と仲良かったっけ？」

「私が声を掛けさせていただきましたの。前から仲良くしたいと思ってまして。」

パート2へ

思わぬ襲来；2（前書き）

パート2☆

思わぬ襲来；2

おもしろい人だ、ことりって。さっきとうってかわって笑顔が溢れている。

「秀人サマ、傘をお持ちでわないの？」

「うん：しゃあねえっ！ 篠宮！ 入れろっ！」

「長池に入れてもらえばいいだろ……。」

ぶつくさ言いながら秀人はことりの傘へ入った。秀人がこっちの方
向へ来たということは、私の家に来る気か……。

「恵の家、行っている？」

「春樹も来るなら許す。……ことりも来る？」

「いいの？ じゃあお邪魔しようかな。」

ことりは私の家を見て少し引いたようだ。まあ、無理もないか…。

「それで、何故急に二人は仲良しに戻ったの？」

「……恵が…言ったから。」

濡れた頭を拭きながら春樹が言った。横で秀人が笑っている。…その横でことりがおどおどしている。

たわいもない話をしていると、気付けば夕方だった。

「私そろそろ失礼しないと……今日はありがとう、恵！」

「あ……うん。また明日ね、ことり！」

そう言って帰って行った。すると待ってましたと言わんばかりに…

「恵の好みって、一体どっち!？」

秀人が聞いてきた。最近、質問が多いな…。答えるこっちの身にもなれよ。

「好みなんてないよ。優しい人ならそれでいい。」

「……帰るぞ鳳来。もう夕方だ……。」

春樹は立ち上がると、帰りの支度を始めた。

「なんで俺も!？」

「二人にすると、お前が暴走するだろ?」

泣き目の秀人を無理矢理引っ張って、二人は帰って行った。……雨の音が響いている……。

ピンポーンッ…

誰だろう。何だか今日は騒がしい…。

「ごめんなさい、忘れ物しちゃって。」

ドアを開けると、ことりがいた。

「何? 取ってくるよ?」

ニコツとことりが笑う……。

「物じゃないの。」

「あなたに言いたいことがあって。」

ことりの表情が曇る…。

「私は春樹サマが好きなの。中学の時からよっ！　あなたより、ずっと彼のことを想っているわっ！」

そのあまりの豹変ぶりに少し引いた。ことりは今にも泣き出しそう
だ。

「だから？　私は春樹のこと、何とも……」

「負けないからっ！！」

そう言うど……ことりは立ち去った。私はただ立ち尽くしていた。
ただただ、ことりの後ろ姿を見ていた……………。

雨が、いつもより冷たく感じた…。

思わぬ襲来；2（後書き）

なかなか思い通りに書けにゃいにゃん♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5469x/>

ネ申×2＋庶民=???

2011年11月10日01時22分発行